

Community Contribution White Paper

地域・社会貢献白書

2025



学長挨拶／理事長挨拶	1
知の拠点化推進室長 阿部圭司教授	2
特集:共同教育研究センターキックオフイベント 田内学氏講演会で伝えた同センターが目指す理念	3-4

● 研究による社会貢献

地域科学研究所	5-6
宿場町・新町を中心にみる、歩く——身近なまちの歴史探訪—— 鈴木耕太郎准教授	7
倉渕町の有機農業に関する情報発信促進活動 倪鏡准教授	8

● 教育による社会貢献

高大コラボゼミ 矢野修一教授	9
澁川市中心市街地活性化のための調査業務 坪井明彦教授	10

● 課外活動による社会貢献

学生ボランティア活動支援室	11
ボランティアサークルACT(アクト)	12
高崎まちなか教育活動センターあすなろ	13
NPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)	14
T-GRAP(高崎GPSランアートプロジェクト)	15
高崎経済大学水泳部	15
WIN-WINプロジェクト	16
その他の取り組み	17
ラジオゼミナール	18

地域・社会と共に歩む 高崎経済大学

高崎経済大学学長 水口 剛



経済格差の拡大や少子化、気候変動と異常気象、AIの進化やデジタル化に伴う働き方の変化など、社会には課題があふれています。それらのどんな課題にも共通するのは「人」が解決の鍵を握るということです。本学は、充実した教育を通じて有為の人材を送り出し、彼らが社会で活躍することで課題解決に貢献するということを基本に据えています。そこで経済学や地域政策学をしっかりと学ぶことに加え、グローバル、デジタル、データサイエンス、AIを集中的に学ぶ共同教育研究センターの開設に向けて取り組んでいます。今回の白書では、そのキックオフイベントとして、ベストセラー『君のお金は誰のため』で有名な田内学氏を招いたシンポジウムの様子を紹介しています。

また、個々の教員が研究の成果を通じて地域や社会に貢献することに加え、ゼミ活動を通じて地域の現場にも足を運び、地域の人と一緒に汗を流して地域の支援もしています。その中のいくつかの事例を掲載したほか、地域科学研究所を通じた多様な活動の様子や高崎経済大学附属高校との連携活動も取り上げました。

より直接的な地域貢献活動の力になるのが、4,000人いる学生の力です。学生たちは部活動やサークル活動を通じて、さまざまな場面で主体的に地域貢献活動に取り組んでいます。本学の学生が運営する「cafeあすなろ」は高崎市内の賑わいに貢献していますし、学生ボランティア活動支援室では地域からの要請に応え、昨年度延べ1400人を超える学生をボランティアとして派遣しました。

本学は地域に根ざす大学として地域や社会の皆様と共に歩んでいきたいと願っています。この白書を通じて本学の本学の学生や教職員による多面的な地域や社会への貢献の様子を感じて頂ければ幸いです。

情報発信としての「白書」

高崎経済大学理事長 市川 豊行



今年も、「地域・社会貢献白書」の発刊の運びとなりました。これで、7回目になります。2024年は、コロナ禍が落ち着き、対面での活動が本格的に再開してきました。就職活動やボランティア、アルバイトなど、さまざまな分野で活発な動きが見られ、本学でも教員・学生のキャンパス内外での活動が活発に行われるようになってきました。

高崎経済大学は、教育研究活動はもちろんのこと、地域・社会貢献活動についても、多方面にわたって行っています。しかし、残念ながら、その実情は市民にはあまり知られていないようです。また、部分的には知られていても、全体像はどうかということになるとまず誰も知らないのではないかと思います。

それぞれの活動に対する評価は別として、「地域に根を張り世界と交流する知の拠点」を標榜する高崎経済大学として、そもそも地域・社会貢献活動として何をやっているのか、またそれはどういう体系的な考えのもとにやっているのかが明らかにされる必要があります。まさにそれらの活動を取りまとめたのが、この「地域・社会貢献白書」です。

今後、市民を中心とした皆様方と地域を共有し、さらなる地域貢献を目指すとともに、地域・エリアに捉われない社会貢献活動にも一層励んでいく所存です。是非、ご一読いただき、地域・社会貢献活動に対するご示唆をいただければまことに幸甚に存じます。

多角的な地域・社会貢献への取組:研究・教育・課外活動

知の拠点化推進室長 阿部圭司

本学では、地域における「知の拠点」としての機能を発揮するため、「知の拠点化推進室」を設置しています。推進室は、地域連携を進める主要な取り組みとして、地域科学研究所の事業および高大連携事業を統括し、地域・社会貢献活動の中核的な役割を担っています。本学の地域・社会貢献活動は、学部や部局の枠を超えて展開されており、教育・研究活動に加え、学生による課外活動に至るまで、さまざまなレベルで取り組まれています。こうした多様な活動は、地域との協働を通じて、大学の社会的責任を果たす重要な手段となっています。

本白書は、これらの活動に関する情報を集約し、可視化することで、その全体像を広く発信することを目的としています。今回の白書では、2024年度に実施された1年間の活動を紹介しています。

大学による地域・社会貢献活動は、活動の担い手に着目すると「教員による貢献活動」と「学生による貢献活動」とに分けることができますが、活動内容に着目すると「研究による社会貢献」、「教育による社会貢献」、「課外活動による社会貢献」の3つに分けることができます。本白書ではこの活動内容に着目した分類にしたがい、本学における2024年度の地域・社会貢献活動を紹介します。

特集では「きみのお金は誰のため」の著者である田内学氏による講演会の模様を紹介します。本学在学学生をはじめ、高校生やその保護者、市民の皆さまなど、多くの方々に参加いただき、お金の本質やそれを取り巻く社会の仕組みについて、様々な視点で分かりやすくお話いただきました。

研究による地域・社会貢献

長年にわたり地域連携に取り組んできた地域科学研究所の取組をご紹介します。公開講演会や中央公民館との連携公開講座、あすなろ市民ゼミ、地元学講座など、講演・講義形式の取組に加え、プロジェクト研究の成果をまとめた書籍の出版や、ブックレットの発行など、出版を通じた知の還元も行っています。さらに、地域を実際に歩いて学ぶ「地域めぐり」のようなフィールド体験型の活動も展開しており、様々なチャンネルを通じて市民への知の還元に努めています。今年度の本白書では、数ある活動の中から新町での地域めぐりと、倉洲町での特色ある有機農業に関する情報発信をトピックとして取り上げました。

教育による地域・社会貢献

教育を通じた地域・社会貢献の組織的な取組として、地域の高等学校との高大連携事業が挙げられます。中でも、高崎経済大学附属高等学校との連携は、高崎市

と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材の育成を目指す『TSUBASA プロジェクト』の一環として、附属高校2年生、3年生の「高大コラボゼミ」として定着しています。

また、本学では、地域政策学部を中心に地域課題を研究テーマとして取り組むゼミナールが多いことが特色です。今年度の本白書では、ゼミナールの教育活動におけるProject-based Learning の例として、渋川市の中心市街地活性化のための調査を取り上げています。

課外活動による社会貢献

本学には、課外活動を通じて地域・社会貢献を目指す学生団体が多数存在しています。本白書では、その中から特色ある取り組みをいくつか取り上げました。ボランティアサークルACTは、地域振興や地域活性化を目的とした活動に取り組み、地域イベントの支援や企画を通じて地域とのつながりを深めています。「cafe あすなろ」は、学生が主体となってコミュニティカフェを運営し、地域住民との交流の場を創出しています。国際ボランティア学生協会(IVUSA)は、地域課題への取り組みを通じて、幅広い社会貢献活動を展開しています。T-GRAPは、ゴミ拾いをしながら計画したルートを移動し、その軌跡をGPSで記録することで、地図上に文字や絵を作り出す「GPSアート」を実施し、環境美化と創造的表現を融合させた新しい地域活動の形を提案しています。「WIN-WIN プロジェクト」では、農作業の支援を求める農家と農業体験を希望する学生をつなぎ、双方にとって有益な交流の機会を提供しています。これらの活動は、学生の主体性を育むとともに、地域との協働を通じて社会的な価値を創出する重要な取り組みとなっています。

本白書で紹介した地域・社会貢献活動は、地域社会、自治体、各種団体の皆様からのご支援により成り立っています。貴重な研究のフィールドの提供や、課題発見の機会、さらには学生にとっての成長の場を数多くご提供いただいていることに、改めて深く感謝を申し上げます。

地域の現場で得られた知見や経験は、学生の学びを豊かにするだけでなく、教職員にとっても新たな研究の契機となり、本学にとって大きな財産となっています。こうした実践的な学びと研究の循環は、大学の社会的役割を果たすうえで極めて重要であると考えています。

今後も本学は、「地域とともにある大学」として、教育・研究の枠を超え、地域の課題に寄り添いながら、共に考え、共に行動する姿勢を大切に、教職員・学生一体となって地域・社会貢献活動に取り組んでまいります。

引き続き、皆様の温かいご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

共同教育研究センターキックオフイベント 田内学氏講演会で伝えた同センターが目指す理念

共同教育研究センターが目指すもの

本学では、現在、数理・AI・データサイエンス、語学力の強化といった教育を全学的に推進しつつ、グローバル×デジタル×起業家精神を育てる拠点「共同教育研究センター」を令和9年に開設すべく構想を進めています。この共同教育研究センターは大学だけで完結するものではなく、地域企業や市民との連携・共創によって新しい価値を生み出す場となることを目指しています。そしてその根底にある理念は、「誰のために、何のために学ぶのか」という“志”の育成にあります。

令和7年1月23日(木)、この共同教育研究センターの理念を、広く周知するためのキックオフイベントとして、ベストセラーとなったビジネス書「きみのお金は誰のため」の著者田内学氏を招き、学生、高校生、そして市民を対象にした講演会を行いました。

き方の指針を、自分自身の中に持つことが不可欠です。田内氏の「きみのお金は誰のため」という問いかけは、まさにその「原点」を思い起こさせるもので、この講演会は、共同教育研究センターが地域や社会に何を貢献したいのかを示す機会となりました。

講演会は、2部構成で行われ、冒頭、水口剛学長から講演会の趣旨、共同教育研究センターが目指す理念について説明があった後、第1部では、田内氏から「10代の皆さんと考えるお金の真実と社会のしくみ」というテーマで、お金と社会の関係、人としての働き方について、高校生にもわかりやすい深い示唆を与える内容の講演、続く第2部では、大手IT企業で生成AIの最新技術や製品の魅力を世の中にわかりやすく伝えるエヴァンジェリスト(伝道師)として活躍し、共同教育研究センター構想の外部協力者でもある野口圭氏、石川和也氏を迎え、社会における自分の付加価値や社会との接点について語るトークセッションを展開しました。当日は、平日16時開始という時間にもかかわらず、在学生、近隣の高校生、一般市民の方など224人の参加者を迎えた盛況な会となりました。

基調講演「お金の真実と社会のしくみ」

第1部の基調講演では、田内氏から、経済を「自分」と「社会」という2つの視点から見ることの重要性が語られました。田内氏は「経済活動において、かつてはお金が制約条件だったが、現在は人手不足が長期的な課題となり、今後もこの傾向は続く見込みである。これにより、お金だけでは問題を解決できない局面が増えてくる。お金は、価値の本質ではなく、『誰かに働いてもらうためのチケット』。お金に価値を与えているのは、それを使って誰かが動いてくれるという社会的合意である。つまり、お金そのものが社会を回すのではなく、それを受け取って働く人の存在が経済の実体を成している。」という視点を与え、関連して「老後

田内氏は、かつて世界有数の金融機関であるゴールドマンサックスに勤務し、グローバルなお金の流れとその本質を深く見つめてこられた方で、「お金の向こう側」にある人や社会とのつながりに目を向け、会社を飛び出し、「誰のために、何のために働くのか」という問いを発信する活動を続けてこられています。その思想はまさに、本学が目指す共同教育研究センターの理念と深く重なります。共同教育研究センターは、AI・データ・語学といった実践的な知識やスキルの修得にとどまらず、それを「誰のために使うのか」という志の育成を最も重要な柱としています。単なるテクニカルな教育ではなく、社会の課題に向き合い、解決する力を持った人材を育てたい、そのためには、学ぶ動機や生



資金の不安から投資や資産運用で備えるという考え方が広がっているが、それは社会全体の根本的な問題解決にはならない。将来的な労働力不足や生産力の低下は、いくら個人が資産を増やしても、結局インフレを招くだけで意味をなさない。」との指摘がなされ、「だからこそ必要なのは、少ない人手で社会を回す生産性向上や、子育て・働き方改革などの仕組み作り。経済とは、単なるお金のやり取りではなく、人がどのように働き、支え合うかという社会の設計の問題でもある。」と少子化時代を生きる若者に示唆を与えました。

最後に、若い世代に向けて、「自分がやりたいことを実現するためには、それが社会や他者にどう貢献するのかという視点を持つことが、結果として成功に近づく。」というメッセージを強調しました。



第2部のトークセッションでは、田内氏に加え、AI分野の最前線で活躍する野口氏、石川氏を加え、フリートークを展開しました。来場者から募集した質問をきっかけに「付加価値」、「コミュニティ形成のカギ」、「文系学生にできること」がキーワードとなり、それぞれの実体験をもとに、共同教育研究センターの開設を見据えたトークセッションとなりました。

初めに自身の収入が数年で倍になったという野口氏のエピソードから「付加価値」への意識の重要性が語られ、野口氏は「お金はまさに『誰かに働いてもらうためのチケット』であり、それを得るには、自分がどのような価値を提供できるかを考える必要がある。」と話し、田内氏もこの考えに呼応し、「終身雇用や年功序列が崩れつつある現代では、個人の価値がより正当に評価される社会へと変化している。」と指摘しました。一方で、野口氏は「この社会は成果主義的で厳しい側面も持つが、人は誰でも輝ける場所がある。自らの強みと社会との接点を見出すことが、これからの時代を生き抜く力になる。」と語りました。

続いて、「社会課題に立ち向かうには、個人の手力だけでなく、仲間の存在が欠かせないが、コミュニティ形成の鍵は何であるか」との質問から、「どう仲間を得るか」がテーマとなりました。野口氏は、「人が集まるのはお金ではなく、夢や志、人間的な魅力である。」と語り、自らの志に共鳴して仲間が集まってきた自身の経験を紹介しました。石川氏は、「現代は幕末に似ている。当時と同様、時代の閉塞感を

打破するのは志であり、それが仲間を引き寄せ、未来を切り拓く鍵。」と説きました。一方で、田内氏は、「昔は農村のような職住が隣接したコミュニティがあり支えあっていた。今はそういうものは重たいととらえられている。趣味やレジャーを基盤とした気軽に参加できるつながりが案外大事なのではないか。」と提起しました。

最後に、「文系学生にできる創造とは何か」という学生からの問いが投げかけられ、石川氏は、「一人でやるのではなく、チームでやればいい。I(私)ではなくWE(私たち)で考えれば、何でも形にできる。」と語り、理系・文系の壁を超えた協働の力を強調し、野口氏は、「文系学生が持つ特性に注目するとよい。経済学や地域政策学といった学問は、多様な構成要素を俯瞰的に捉える力を養う。そうした文系的な視点こそが、つながりを創る力であり、複雑な社会構造を読み解く力が、プロジェクトのリーダーとして不可欠である。」と語りました。田内氏は、「何を作るかではなく、誰のために、何のために作るのかが重要で、その出発点にあるのは観察力だ。社会課題とは、どこか遠い場所にあるものではなく、すでに自分の身の回りに存在している。だからこそ、何に困っているのか、どんなことで人が喜ぶのかに気づく力が、最も本質的な力になる。何よりもまず大切なのは、問いを持つ目だ。」と締めくくりました。

最後に、水口学長が、共同教育研究センターが目指すのは、まさにこうした志の共創を実践する場であり、文系だからこそできる役割がそこにあるとまとめ、トークセッションが終了しました。

キックオフ講演会を終えて

トークセッション終了後、たくさんの学生や高校生が列を作り、登壇者に共感や興奮を伝える様子が見られました。終了後も残るそうした熱気からも、本講演会は、若者が共同教育研究センターが目指す志の共創という理念に共鳴する場として有効であったと評価しています。今後も本学では、共同教育研究センターの設立と共に、地域企業や市民との連携を通じて、知識や技術だけでなく、「誰のために学び、働くのか」という本質的な問いを育む教育を行い、地域と共に社会課題に向き合い、持続可能な未来に貢献できる人材の育成を推進していきたいと考えています。



2024(令和6)年度地域科学研究所活動報告

地域政策学部教授・地域科学研究所長 佐藤徹

2024年度は、地域社会が直面する多様な課題や新たな可能性に向き合い、市民一人ひとりの学びや交流が、より豊かな地域づくりへと結実するよう、さまざまな取組を推進しました。

具体的には、公開講演会や連携公開講座、秋の連続講座、あすなろ市民ゼミ、地域経営セミナー、地元学講座、地域めぐりといった各種の事業を実施しました。講師の先生方をはじめ、関係各所の皆様のおかげでこれらを遂行することができました。あらためて感謝申し上げます。また、プロジェクト研究の成果物としては、書籍2冊とブックレット2冊を発刊することができました。以下では、写真を交えながら、ご紹介いたします。

【公開講演会】

◆ 第21回:「性にまつわる議論の『すれ違い』」(2024年11月9日(土) 高崎経済大学図書館ホール)

批評家・ライターとして活躍されている瀬戸マサキ氏による、“性にまつわる議論の『すれ違い』”と題し、誠実で謙虚な議論をするための「LGBTQ+争点」基礎知識についての講演会を開催しました。



第21回公開講演会:瀬戸マサキ氏

◆ 第22回:「ダークツーリズムとはなにか—北陸新幹線延伸が生む高崎との縁を踏まえて—」(2025年2月19日(水) 高崎経済大学6号館621教室)

金沢大学国際基幹教育院教授であり、日本にダークツーリズムを広めた気鋭の観光学者である井出明氏をお招きし、ヨーロッパをはじめ世界で盛んに研究されている“ダークツーリズム”について講演いただきました。

【連携公開講座】

高崎市中央公民館にて、5月18日から6月15日にかけて5回にわたり、高崎経済大学地域政策学部観光政策学科編『大学的群馬ガイド—こだわりの歩き方』をテキストに使用し、執筆者である所員5名による高崎経済大学連携公開講座を開催しました。



連携公開講座:安田慎所員



群馬ガイド表紙

【公開講座】

◆ 第41回:「現代社会への多面的アプローチ」

10月4日から12月3日にかけて、本学教員による全10回の公開講座を開催しました。



第41回公開講座:森田稔所員

【あすなろ市民ゼミ】

cafe あすなろにて本学教員による少人数ゼミナールを開講しました。9月20日から10月18日までの全4回のゼミナールでは、各回を担当する教員がそれぞれのテーマを設定し、事前課題をもとに学習と討論を行いました。

【地域経営セミナー】

◆ 第7回:「自治体のEBPM—ロジックモデルとデータ分析を中心に」(2024年12月6日(金) 高崎経済大学図書館ホール(ハイフレックス型))

基調講演には、追手門学院大学地域創造学部教授である小野達也氏を迎え「自治体のEBPM」をテーマに設定し、EBPM推進のための具体的な手法や課題解決策について講演いただき、その後、総合討論が行われました。

【地元学講座】

◆ 第17回:「今さら聞けない児童養護施設のあれこれ」(2024年9月27日(金) 児童養護施設希望館)

第17回地元学講座は、高崎市の児童養護施設希望館

の全面的な協力を得て、開催しました。「今さら聞けない児童養護施設のあれこれ」というテーマで、児童養護施設希望館の赤池裕統括施設長と小椋里香施設長にお話いただきました。

【地元学講座】

◆ 第18回:「ドイツ人建築家ブルーノ・タウトの少林山達磨寺の足跡」(2025年2月17日(月)高崎経済大学6号館621教室)

ブルーノ・タウト(Bruno Taut)は20世紀初頭のドイツの世界的に著名な建築家であり、2年以上にわたり高崎の少林山達磨寺に逗留した歴史があります。第18回地元学講座では少林山達磨寺の現任職である廣瀬正史氏をお招きし、タウトの生涯や当時の地域住民との関わりについて講演いただきました。



第18回地元学講座:廣瀬正史氏

【地域めぐり講座】

◆ 第16回:「地形模型で学び、榛名地域をめぐる」(2024年10月14日(月))

コーディネーター:太田慧所員(地域政策学部准教授)

高崎経済大学図書館ホールにて、地形模型を使ったプロジェクションマッピングを用いて榛名地域の様子を視覚的に学習し、その後、実際に榛名地域に出かけ、太田所員と協力学生による解説を交えながら自然環境や歴史が重層的に重なった地域の成り立ちへの理解を深めました。



第16回地域めぐり講座:太田慧所員(左) 学生による現地での解説の様子(右)

◆ 第17回:「宿場町・新町を中心に見る、歩く～身近なまちの歴史探訪～」(2025年2月1日(土))

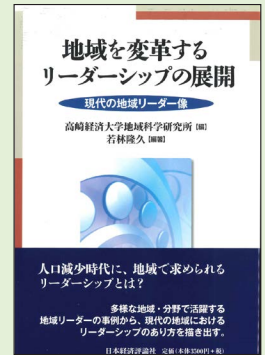
コーディネーター:鈴木耕太郎所員(地域政策学部准教授)

中山道の宿場町の一つとして栄えた新町宿を中心に、今でも往時の様子を感じることができるスポットをコーディネーターである鈴木所員の解説を交えながらめぐりました。

【プロジェクト研究】

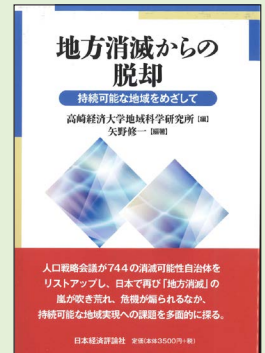
◆ 現代の地域におけるリーダーシップのあり方の研究

2020～2023年度「現代の地域におけるリーダーシップのあり方」をテーマとする研究が、『地域を変革するリーダーシップの展開—現代の地域リーダー像—』(日本経済評論社)として結実しました。



◆ 日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題

2021～2023年度「日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題」をテーマとする研究が、『地方消滅からの脱却—持続可能な地域をめざして—』(日本経済評論社)として結実しました。

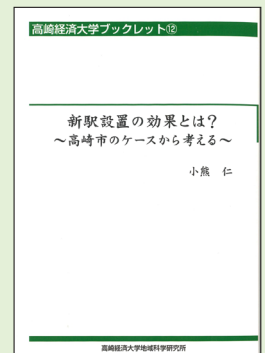


【ブックレット】

⑫『新駅設置の効果とは?～高崎市のケースから考える～』

高崎市における鉄道駅設置の効果テーマに、地域科学研究所・小熊仁所員(地域政策学部教授)が執筆いたしました。

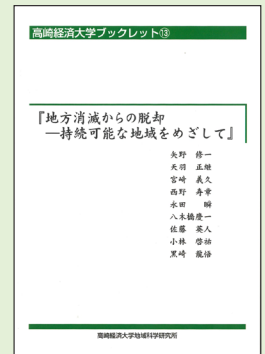
本書では特に「存在効果」に焦点を当て、アンケート調査を基に駅設置がもたらす社会的・経済的な多様な影響を分析し、鉄道駅が地域社会にもたらす長期的な影響を展望しています。



⑬『地方消滅からの脱却—持続可能な地域をめざして』

高崎経済大学地域科学研究所が2025年3月に日本経済評論社から刊行した『地方消滅からの脱却—持続可能な地域をめざして—』のダイジェスト版です。

少子高齢化や東京一極集中が進む現代日本において、地域社会の持続可能性を探索するため、学際的な視点から多様な論点を取り上げ、先進事例や理論研究を通じて、地域社会の再生に向けた具体的な政策提言が示されています。



宿場町・新町を中心にみる、歩く——身近なまちの歴史探訪——

地域政策学部准教授 鈴木耕太郎

2025年2月1日(土)、地域科学研究所の主催の「地域めぐり」が実施された。今回の巡見先は高崎市新町、そして玉村町である。多数の方がご応募くださり、抽選の結果、市民12名(うち1名は体調不良でご欠席)にご参加いただいた。

実は2023年に初めて地域めぐりのコーディネーターとして企画したのが宿場町・倉賀野の巡見だった。このときは——もちろんご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様のお陰ではあるものの——手前味噌ながら確かな手応えを感じる企画となった。そのため、同巡見中に群馬県内の宿場町、とくに中山道沿いの宿場町を見て、歩いたらどうだろうか、と思ったのが新町を歩く動機である。

しかし、倉賀野と新町とでは当然ながら立地や歴史的経緯からまるで違う。これは事務局との下見の段階で痛感した。端的に言えば、宿場町の面影を建造物などで残している倉賀野に比べ、新町はその面影・足跡を街並みで見出すことはなかなかできない。ここが倉賀野と大きく異なる部分である。

しかし、武蔵・上野国の国境で、宿場成立以前から滝川一益と北条氏直・氏邦とが闘った神流川合戦が行われた歴史的な場でもあるため、文献類により歴史を掘り下げることは可能であった。また、説話・伝承(伝説や世間話)、そして寺社仏閣と町の関係性にも着目すると、歴史的事実とは異なるもう一つの新町の「歴史」が浮かび上がってきた。こうした文献から読み取れる情報をいかに活かすべきか、いつもは特段気にもせず通り過ぎるであろう町の景色に「歴史」が潜んでいることをいかに伝えるべきか。今回、最も苦心したのはこうした点だった。

こうしたとき、点と点を線で結び、一つのまとまった「ストーリー」を作る、という手法は良く取られる。しかし、無理やり一つのストーリーとしてまとめるのではなく、なぜこうしたものが点在するのか、そしてそこに宿場町としての新町の特質性がどう関わっているのかを参加者に考えてもらい、各自の解釈の余地を与えることも市民参加型の巡見企画としては大切なのではないかと考えを改めるようになった。もちろん、コーディネーターとして適宜、正しい情報(歴史的事実や研究成果からわかっていることなど)を伝えるわけだが、最初からすべて説明するのではなく、「なぜ?」「どうして?」を考えながら参加者に歩き、見ってもらうようにしたのである。

こうして何とか企画の骨子は固まったものの、正直に言えばまだ物足りない部分もあった。そこで事務局・井野さんとも相談をし、近世に日光例幣使街道の宿場町として栄えた隣接する玉村町へと脚を伸ばすこととした。新町と玉村とは現在の行政区も、そして過去の宿場町としても異なる地域ではあるが、一方で隣接しているからこそ双方を行き来する人々も当然多かった。そのため、旧新町宿と旧玉

村宿とを双方行き来し、比較することも重要だと考えたのである。

かくして企画当日となり、神流川合戦の痕跡といえる首塚・胴塚(藤岡市)をめぐるのち、新町八坂神社、諏訪神社、明治天皇行在所跡、於菊稲荷神社、十石街道と閻魔堂、小林本陣跡、宝勝寺と宿場町・新町を歩き、その後、バスにて玉村町へと向かい。昼食後、玉村歴史資料館、木島本陣跡、そして玉村八幡宮と井田家住宅、称念寺とかなり濃密な時間を過ごすことができた。参加者からも好評の声をいただき、県内の他の宿場町を歩きたいとの声も聴かれた。

もちろん、こうした成功は、参加者の皆様の前向きに学び取ろうという姿勢があつてのことである。また玉村町歴史資料館さん、そして事務局(研究支援チーム)の井野さんや濱さん、さらに手伝ってくれた学部生の佐藤空さんのご助力なくしては成立し得なかった。この場を借りてこの企画にご参加・ご協力いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。



視察の様子_神流川合戦場跡



新町八坂神社での講師による解説



玉村町歴史資料館で解説を受ける参加者

倉渕町の有機農業に関する情報発信促進活動

地域政策学部准教授 倪 鏡

本研究室は農業・農村問題を理論的、実践的に学ぶことを重要な教育内容とし、特に農山村でのフィールドワークを通じて自ら地域づくりの活動に取り組むことが特徴である。2024年度に群馬県やま・さと応縁隊事業を活用し、学生が主体として高崎市倉渕町における有機農業に関する情報発信促進活動に取り組んだ。そのきっかけは、私が長年研究のフィールドとしてきた倉渕町にある有機野菜生産者組織くらぶち草の会(以下“草の会”とする)からの要望である。

活動の経緯

高崎市倉渕町は、地域の自然を生かした有機農業と、地域外からの新規就農者を受け入れる活動に長年取り組み、多方面から高い評価を受けている。しかし、サポート人材の不足により、様々な地域活動に関する情報発信が不十分であった。特に草の会の場合、2020年以降コロナ感染症拡大と重なって、就農相談会にも出展できなくなり、一時就農希望者が大幅に減少し、関係者たちは頭を抱えていた。

研究室の学生たちは予備調査でその悩みを知り、倉渕地域の様々な取組を社会に情報発信する必要性を強く感じた。そのため、まずは若者の視点を生かし、倉渕町の農業の魅力や新規就農者の生き生きとした姿を紹介するパンフレットを作成しようと考えついた。

取組内容

第一歩として研究室で複数回勉強会を開催し、それを通して学生たちが地域の概況を把握した。そのうえで、8月に第1回現地活動を実施した。草の会初代会長の佐藤茂さんに組織の設立経緯や取組内容、そして新規就農支援(草の会の取組、国の支援)の状況などについて話を伺い、その後圃場や施設も見学した。その他、東善寺や道の駅くらぶち小栗の里も調査し、地域の様々な側面を認識することができた。

第2回現地活動では、主に草の会の生産者(=新規就農者)を対象にヒアリング調査を行い、彼らの就農経緯、営農状況そして地域での活動状況等を把握した。一泊二日の活動の中、学生たちは調査のほか、生産者らの圃場で農作業を体験したり、生産者からいただいた野菜を自分たちで料理するなど、農業の大変さと楽しさの両方を肌で感じた。

また、草の会は消費者との交流を大切にするため、毎年11月に収穫祭を行っている。第3回現地活動はこの収穫祭に合わせ実施した。学生たちは運営スタッフとして、プログラムの進行を手伝いながら、草の会の消費者とも交流することができた。

その後、11月に群馬県主催のオーガニックフェスタ、12月に就農相談会にも参加し、パンフレット作成の素材を収集した。現地活動のほか、学生たちはヒアリング調査で得た情報を整理・分析し、パンフレットのレイアウト、キャラクターのデザインなど、作成作業も着々と進めた。

最終段階を迎えた1月に、学生たちは作成途中のパンフレット原案を持ち再度倉渕町を訪れた。第6回現地活動として、掲載用の写真撮影を行ったとともに、生産者らに原案に対する意見や要望を伺った。大学に戻ってから、その内容を踏まえ、さらに修正を加えやっとなんが満足したパンフレットを完成させた。

できあがったパンフレットは、①特色のある有機農業、②地域外・農外からの新規就農者、③地域内外との交流、と豊富な内容から構成され、学生たちがデザインした野菜をモチーフとしたキャラクターを盛り込んだ倉渕町の魅力満載のものとなった。

活動成果

完成品を見た生産者たちは、「若者の視点から倉渕地域の農業、くらぶち草の会の取り組みを紹介するパンフレットができて地域の情報発信に大変有意義なものだ。今後も活動を続けてほしい。」と高く評価してくれた。

学生たちは活動を通してやりがいを感じただけでなく、農業・農村問題に対する理解も深まった。「普段テキストで学んだ高齢化の進展、農業後継者の不足等の地域社会の問題に、身をもって感じた。」「またそうした問題の解決を考える上で、新しい視点も得られた。」と様々な感想を寄せた。成果報告では、今後現地調査を深化させ、農村が抱えている様々な問題の解決を実践してみたいと抱負も語っていた。



高大コラボゼミで若者が育つ —「世界は誰かの仕事でできている」を実感しながら

経済学部教授 矢野修一

日本企業のケーススタディを通じ、専門的知識・英語力・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を高めるとともに、進路・キャリア意識の涵養を図ることを目指す「高大コラボゼミ」は、2010年、高崎経済大学・矢野ゼミ3年生と高崎市立高崎経済大学附属高校3年1組生徒との間で始まりました。

あれから15年。今では、高経大・阿部圭一ゼミ3年生の指導を得ながら高経附2年1組の生徒が「日経ストックリーグ」に参加するプログラムも定着しています。コラボゼミは、高経附の探究学習の大きな柱であり、同校の人気を高めるファクターのひとつとなっています。

「ゼミ」という以上、教室内での一方的座学と違い、高校生も、事前準備を行ったうえで、グループ内で実際に発言し議論しなければなりません。一方、大学生は「教えることを通じて学ぶ」を実践します。いかなる内容・事象であれ、本当に理解していなければ、高校生に教えることはできないからです。

高校の通常授業で個別の「企業」そのものを学習することはありません。私の担当するコラボゼミでは、高校生・大学生混成の6グループが6つの日本企業について、並の就活生など及びもつかないほど綿密に研究します。高校生と大学生は、6社の統合報告書、IR資料、新聞・雑誌・テレビのニュースや解説などを材料に議論を積み重ね、企業の沿革、同業他社の動向、中期経営計画の意味、株主総会の様子、グローバル経済の動向などについて、4か月にわたり研究を深めていきます。

その後、実際に企業を訪れ、インタビューをしたのち、8月、研究成果を発表します。主役は高校生です。大学生はサポート役に徹します。高経大の大教室において、英語を交えながら、数百名の聴衆の前で成果が披露されます。成果発表会には、訪問企業の担当者もお見えになります。

本社に足を踏み入れ、居並ぶビジネスパーソンに質問を投げかけ、やりとりするのは、緊張の連続です。しかしながら、入念な準備ののち、直接対面してお話を聞くことによって、高校生・大学生とも「世界は誰かの仕事でできている」を実感します。そして将来、その「誰か」になって「仕事」をすること、「誰か」になるために、これからやらなければならないことも認識するようになります。

高大コラボゼミは、高崎発の「高・大・産・老」連携教育モデルです。研究対象とする企業は、経営支援NPOクラブ（大企業を退職された方々による社会貢献団体）に仲介いただき、毎年、業種・業態も様々な企業にお邪魔してきました。「老」とは老人ではなく、次世代に教える授ける「老師」という意味です。老師たちに支えられ、高校生・大学生は、15年間で、のべ96社を研究できました。

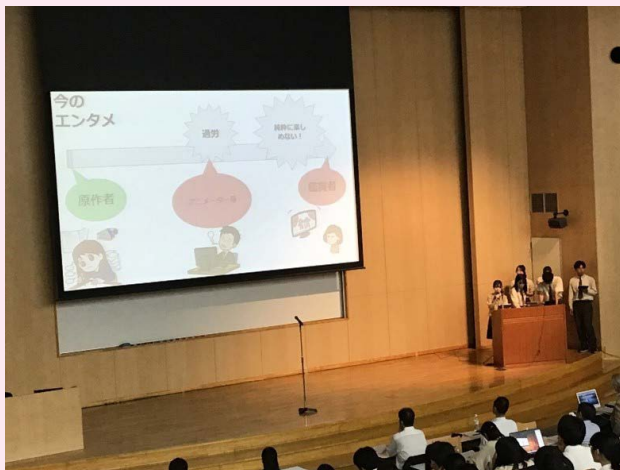
高大コラボゼミは、開始以来、各方面から注目され、新聞

や雑誌でも取り上げられました。本学産業研究所（現・地域科学研究所）でも『高大連携と能力形成』（日本経済評論社、2013年）の中で中間的総括を行いました。今では、高大コラボゼミを経験した高校生約350名、大学生約160名が国内外の各地域・各方面で活躍しています。コラボゼミについて、詳しくは、高崎経済大学ブックレット⑦『高崎からのグローバル人材育成』をご覧ください。高崎経済大学ホームページから閲覧・ダウンロード可能です。

高大コラボゼミとは、高崎市が設立する唯一の高校、唯一の公立大学法人が、協定書に基づき連携して行うプログラムのひとつです。高経附が文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」に認定されたとき（2014年度～18年度）、さらにはその後継事業である「TSUBASAプロジェクト」でも、中核プログラムとなっています。私は2026年3月をもって本学を定年退職となりますが、次世代を担う若者にとって、高大コラボゼミがこれからも魅力的なプログラムであり続けるよう、関係各方面の尽力を期待しています。



高校2年生_コラボゼミでの学習の様子



高校3年生_オナークラス成果発表会の様子

渋川市中心市街地活性化のための調査業務

地域政策学部教授 坪井明彦

この活動は「若者の視点や外部からの視点を取り入れて調査・分析などを行い、現在の中心市街地が抱える問題点を改めて洗い出し、プロジェクトへの反映や解決策、改善方法を導き出し、中心市街地の活性化及びにぎわい創出につながる施策に活用する」という目的で、渋川市からの業務受託という形で実施したものです。具体的な内容としては、以下の通りです。

1. 中心市街地のあり方の調査・研究

(1) 中心市街地の現状把握

中心市街地の現状把握として、令和6年9月27日(金)に渋川駅前通り周辺の店舗を対象に、『平成29年度渋川中心市街地活性化のための調査報告書』(平成30年3月)の「商店主へのヒアリング調査結果」の更新のためにヒアリング調査を実施したほか、渋川市中心市街地の空き店舗・空地等の現状把握として、令和5年3月、令和6年3月に実施された空き店舗(ビル内)の更新調査を実施しました。

(2) アンケート調査

(イベント来場者および市内高校生対象)

中心市街地のあり方の提言のためのアンケート調査ですが、令和6年10月27日(日)に「渋川駅前通り歩行者天国しゅほっこ」来場者100名から回答を得ました。

また、市内高校生を対象に、令和6年12月上旬に、渋川高校、渋川女子高校、渋川工業高校(渋川駅を最寄り駅とする高校)の生徒を対象に、質問票(紙またはPDFファイル)を送付し、合計561名から回答を得ました。

質問の中で、「将来、渋川市の地域づくりやイベントの運営に関わっていきたくて考えていますか」という質問に対して、「イベントの運営やボランティアを通して関わったことがある」人の場合は、「ぜひ関わりたい」の割合が、他よりも極めて高い結果でした。これは将来の関係人口(地域づくりの担い手)の創出という点で、居住者でなくとも、中学生や高校生の中に、渋川市のまちづくりや中心市街地活性化に関する活動に運営側として関わる経験が非常に効果的であるという点を示唆していると思います。このアンケートを通じて大きな発見があったと思います。

2. 渋川駅前広場の利活用調査

駅前広場の利活用として、市民がイベントを行うだけでなく、市外で行われているイベントを誘致するという点を提案したいという目的で、群馬県内で開催実績があり、

誘致できる可能性があるイベント、または模倣できるイベントについて、インターネット等の情報をもとに調査しました。また、全国のさまざまなイベントを調査し、北海道端野町のイベントを参考に、誘致ではなく市民が主体となって開催するイベントとして、「渋川うどんマラソン」を提案しました。他に、イベントを開催する上でどのような課題があるかを把握するため、イベント主催者にヒアリング調査を行いました。

3. 中心市街地のあり方の提言

今回の調査を通じた主な提言としては、①外部からのイベント誘致、および②イベント開催の担い手の育成の2点があげられます。これまでの市の施策は、市民をイベントの担い手として位置づけ、主催者に市民が一定割合ないと助成の対象にしないルールがありましたが、中心市街地のにぎわい創出という目的を考えると、イベント会場の提供という方向性もあり得るということを提案しました。また、イベント等の担い手の育成という点を考えると、中学・高校生のうちに担い手として参加することで、将来、渋川市に居住していなくても、イベント開催の担い手として関わってくれる、つまり「関係人口」となる可能性が高まるという点が明らかになり、中学生・高校生に対してイベントの運営側として関わる機会を増やすということも提言しました。

これらの活動を通じて、教室の中では得られない経験をすることができました。このような機会を提供いただいた渋川市様に感謝いたします。



学生ボランティア活動支援室

学生ボランティア活動支援室長 阿部圭司

本学の学生ボランティア活動支援室は2018年5月に開設されました。支援室では、地域社会から寄せられるボランティアの要請への対応と、ボランティア活動に関心と意欲を持つ学生に対する支援を通じて、地域社会貢献と学生の成長の間に好循環を生み出すことを目的として活動しています。

学生ボランティア活動支援室は、開設以来、学外からのボランティア要請を受け付け、学生に対して情報を提供する一方で、活動を希望する学生の登録を受け付け、ボランティア活動に関する研修を実施することで、要請内容と学生とのマッチングを行うことを基本的な役割としてきました。また、学内の学生ボランティア団体との情報交換会を通じて、学生の活動状況を把握し、団体と連携して新入生向けの説明会を開催するなど、社会貢献活動の啓発にも継続的に取り組んでいます。さらに、2022年度には学生協働スタッフを設置し、学生の立場から支援室の運営に教職員と協働で携わり活動してもらっています。この他、本学を含めた市内4大学(高崎商科大学、高崎健康福祉大学、新島学園短期大学)による情報交換会を実施して、各大学における社会貢献、ボランティア活動に対する組織的な取組と、地域社会からのボランティア要請に関する情報の共有を進めています。

2024年度の活動を端的に言えば、コロナ禍を経て人々の生活様式が元に戻り、多くの地域で祭りやイベントなどの社会的交流が以前の水準に回復したことを反映し、ボランティアに関わる活動が活発化した点が挙げられます。ボランティア要請受諾件数は80件(2023年度60件、2022年度48件)、ボランティア派遣者総数は1,441人(2023年度1,203人、2022年度770人)となり、受諾件数、派遣者総数共に過去最高の規模となりました。派遣者総数でみると、本学の学生の3人に1人が1度はボランティア活動に参加した計算となります。

今後も大学へのボランティア派遣要請は増加すると予想されますが、大学としては、学外からの要請に対して単なる人的資源の提供にとどまるものは望ましくないと考えています。学生がそのボランティア活動に参加することで、何を得られるのか、どのような学びにつながるのかといった観点を重視し、派遣先にもその点を明確に示すよう求めています。

今後も地域社会からのボランティア要請に応じていくとともに、学内のボランティア団体との連携強化や啓発活動を通じて、地域社会への貢献に積極的に取り組む学生・教職員の意識の醸成に寄与していきたいと考えています。こうした取り組みを通じて、大学としての社会的責任を果たすとともに、学生の主体的な学びや成長の機会を広げていくことを目指します。

2024年度の主なボランティア活動先

- ・群馬県警大学生少年サポーター
- ・高崎市内小中学校学習支援
- ・NPO法人等学習支援
- ・たかさき春まつり
- ・ハナミズキ通り商店会 ドッグウッドフェス
- ・環境フェア
- ・たかさきハロウィン実行委員会、当日ボランティア
- ・キングオブパスタ
- ・高崎まつりボランティアリーダー、一般ボランティア
- ・みのわの里のきつねの嫁入り
- ・NPO法人 花
- ・WIN-WINプロジェクト農作業
(当室企画審査会授賞団体)
- ・T-GRAP(当室企画審査会授賞団体)
- ・おる〜ちえ。(当室企画審査会授賞団体)

学生協働スタッフ

2024年度には、27名の学生協働スタッフがボランティア活動支援室に在籍し、教職員と協働しながら支援室の運営に携わっています。学生の視点を活かし、本学の学生に対してボランティア活動の啓発・推進を目的としたイベントの企画や、ボランティアをより身近に感じられるような情報発信・サポートを行っています。支援室では、活動趣旨を理解し、学内外での啓発活動に協力できる学生を対象に、運営会議やミーティングへの参加を含む協働スタッフを募集しています。

2024年度の主な活動としては、学内では「ボランティアサークル新歓合同説明会」(4月)、「たかけいクリーン大作戦」(7月)、「小学生のための大学キャンパスツアー」(8月)、「大学祭(三扇祭)への企画参加」(11月)、「学生ボランティア活動支援室企画審査会」(11月)などを実施しました。学外では、「高崎市内4大学合同学生研修会」(9月・3月)や「ボランティアフェスティバル」(2月)に参加し、他大学との連携を通じて広報活動や学生スタッフ同士の交流を行いました。特に学外活動では、異なる価値観や取り組みに触れることで、学生にとって学内では得られない学びの機会となっており、今後もこうした活動を、学生の主体的な学びと実践の場として継続していきたいと考えています。

地域と共に歩み続けるために

ボランティアサークルACTは“Area Cooperative Team”（地域に協力的な組織）として2007年に発足し、地域振興・地域交流を目的に活動しています。主な活動として、北部公民館・北部小学校で開催される行事の手伝い、近隣地域の祭りの補助などを行っています。また、2024年度から、新たに高崎ユネスコ協会の青年ユース部に加入しました。群馬県立女子大学の学生とともに野外体験活動や児童作品の表彰式の補助などに参加させていただき、子どもの体験活動のサポートをしています。それぞれの活動では事前の打ち合わせから参加させていただき、最大限になれるように取り組んでいます。

北部公民館での事業

ACTでは北部公民館にご協力いただき、年間を通して様々な事業を行っています。2024年度は、7月に子ども向けの夏祭りであるACT祭、8月に小学生のちぎり絵制作、12月にクリスマス会を実施しました。毎年夏に自主開催しているACT祭では、2ヵ月かけて手作りのゲームを作成し、当日は約50人の子どもたちにご来場いただきました。宝探し・ボーリング・もぐらたたき・万華鏡工作など複数の遊び場を用意して、子どもたちに楽しんでもらえるように工夫しました。8月に行ったちぎり絵制作では、北部学童に通う夏休み中の小学生と一緒に動物や花などのちぎり絵を制作しました。中には初めてちぎり絵を体験した子もいて、「あまりない経験ができて良かった」という感想をいただきました。12月のクリスマス会では、参加した小学生にクリスマスの季節に合った「モビール」を制作してもらいました。材料の準備に少し苦労しましたが、満足げに自分の作品を持ち帰る姿を見たときは、とても嬉しかったです。

子どもの「体験」を支える

2024年度の活動では、子どもの体験活動のサポートをさせていただく機会が多くありました。身近な体験活動として、自主的に近隣の学童を訪問して、一緒に綿あめづくりや絵の制作に取り組みました。さらに、高崎ユネスコ協会の野外体験活動に同行して、群馬の自然に触れる子どもたちをサポートさせていただきました。こうした活動は私たちにとっても貴重な体験になります。地域の納涼祭のお手伝いをした際に関わった方からは、印象的なお話がありました。「地域の納涼祭や運動会はコロナ禍で縮小して、そのまま行事がなくなっている地域もある。子どものときに経験した地域の行事は、その後も大切な思い出としてずっと残り続けるから、自分たちは何としてもこの祭りを続けていきたい。」ボランティアを通じて、地域の方々がどのよう

ボランティアサークルACT(アクト)

な思いを持って行事・体験活動に取り組んでいるのが伝わります。

今後に向けて

私たちは地域の方々のご協力によってボランティア活動ができています。「若い人が来てくれて嬉しい」「また手伝いに来て欲しい」というお言葉をいただくことも多く、自分たちもこの活動にやりがいを感じています。また、ACTでは、ボランティア活動に取り組むに当たって最も重要なことは「継続して参加し続けること」であると考えています。その日限りの手伝いだけでなく、活動後も地域の一員として力になれるように努めていきたいです。「大学生として、自分たちに求められていることは何か」を常に考えながら、今後もより多くの方々の役に立てるように、仲間と協力しながら活動に尽力して参ります！



ACT祭 もぐらたたき



クリスマス会の様子



青年ユースとしての活動

高崎まちなか教育活動センターあすなろが運営する「cafe あすなろ」

高崎まちなか教育活動センター あすなろ

名曲喫茶「あすなろ」の誕生

1957年「郷土を美しい詩と音楽で飾ろう」という理念のもとに誕生した純喫茶あすなろでは、群馬交響楽団の演奏会や、有名詩人による詩の朗読会などが開催され、市民の文化的活動の拠点として親しまれていましたが、高度経済成長の潮流と社会環境の変化などから、惜しまれつつも1982年25年間の営業に幕を下ろしたのです。

その後、高崎市にあすなろをもう一度という市民の声が集まり、高崎市が高崎経済大学にあすなろの復活とその運営を依頼し、NPO法人を立ち上げるという形で、2013年にコミュニティカフェ「cafe あすなろ」が高崎市鞆町に再び、明かりを灯しました。

あすなろのミッションと現在の活動

cafe あすなろは、高崎市及び、高崎経済大学の支援のもと、学生が中心となり運営をしています。あすなろのミッションは「文化的な活動を通して学生の成長と地域活性を目指す」ことです。「学生の成長」とは、あすなろの学生が外部のコミュニティの人と関わることで主体的な学生になり、また内部の物事をチームで行うことで、共同する力を養うことだと考えています。また「地域活性」とは、あすなろという市民が集うことのできる場所が存在すること、学生がイベントを運営したり、地域の方々と連携した企画を行ったりすることで市民が街中に出てくる「きっかけ」となることであり、学生の力で高崎が常に人であふれる街になるように、私たちは日々活動しています。

現在の活動の中で学生は経営班・企画班の2つの班に分かれ、経営班では主にメニュー開発や売上分析などを行い、企画班は主にイベントの企画・運営や出店、広報活動などを行っています。

2024年5月19日に白衣大観音にて開催された「第6回観翠会—和文化ふえす」にcafe あすなろとして出店させていただいた際には、和文化を体験できるイベントにちなみ、高崎の老舗茶店「金子園」さんの抹茶を使った抹茶のスコーンを販売し、イベント当日は他の出店者の方々と楽しく交流しながら販売を行わせていただきました。このように出店活動では、参加させていただくイベントの趣旨に沿った商品や、高崎のお店の食材を使うことなどを意識しながら商品の開発から販売までを行っています。

2024年9月14、15日には「キッズカフェ」という学生主催のイベントを行いました。このイベントは小学1年生から4年生を対象に、コーヒーの手淹れ体験やPOPの作成、レジ作業などcafe あすなろのスタッフの仕事が体験できるイベントです。今回は3回目の開催であり、計28組の親子

に参加していただきました。ここでしかできない体験に目を輝かせながら、一生懸命に挑戦する子どもたちの姿はとても印象的であり、イベントを通して子どもの成長が感じられ、親子の絆も深まるような素敵なイベントでした。今後もこのようなイベントを通して、cafe あすなろが大人にも子供にも愛してもらえる場所を目指して精一杯活動していきます。

高崎市活性化のために

私たち学生は、高崎市や地域の方々に勉強の場を提供していただいています。それに応えるため、今後もより積極的に地域の活性化に貢献したいと考えています。地域イベントへの参加協力や市民団体への施設貸出、文化発信の拠点としての充実、学生の成果発表の場の提供などを通して「cafe あすなろ」が市民文化活動支援と中心市街地の賑わい創出の場となることをこれからも目指していきます。



共に生きる社会の実現を目指して

NPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)

IVUSAの内容と目標

こんにちは!! 私たち、NPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)は全国の80以上の大学の学生約2700人が所属している日本最大規模の学生ボランティア団体です。ボランティア活動は「環境保護」、「地域活性化」、「子どもの教育支援」、「国際協力」、「災害救援」の主に5つの分野で活動を行っています。私たちIVUSAに所属する学生は自分たちが持つマンパワーを活かして社会に働きかけ、社会問題の解決に日々取り組んでいます。ボランティア活動から人や地域とのつながりを作ることで「共に生きる社会」を目指しています。そして熱意は「人を動かし、社会を動かす」というミッションを掲げています。また大学周辺地域で主に活動を行うことからクラブという組織を全国に作り、高崎経済大学は群馬高崎クラブに所属しています。このクラブには群馬県内の4つの大学が所属して様々なボランティア活動を行っています。

高崎清掃活動

高崎清掃活動では、地域の環境美化を目的に高崎市内で清掃活動を実施しています。活動は学生が主体となり、燃えるごみ・不燃ごみ・ペットボトル・缶などを分別しながら回収します。高崎市の高速道路沿いの道や河川敷などを清掃ルートとし、参加者は複数の班に分かれて協力して作業を行います。清掃を通じて地域への貢献だけでなく、参加者同士の交流や環境への意識向上にもつながる有意義なボランティア活動です。また、12月には地域の小学生との活動を実施し、地域の人々との繋がりも感じることができました。今後としては、新たな清掃ルートを開拓し、活動規模の拡大を図っていきたくと考えています。

南牧村活性化活動

南牧村での活動は、南牧村でカフェを営む方のお力を借りながら、南牧村で行われる催しのお手伝いや南牧村の子供達と遊ぶ活動を行っています。南牧村は少子高齢化が深刻化している地域であり、大学生のパワーを南牧村に届け、地域活性化を目的としている活動です。今後もボランティア活動を継続しつつ、IVUSAとして南牧村をさらに盛り上げていく取り組みを住民の方と交流しながら企画・実施していきたいと考えています。

竹林整備活動

竹林整備活動は、高崎市内で農業を営む方が所有する竹

林をお借りし、増加しすぎてしまった竹を伐採し竹林の環境を整える活動を行っています。成長速度が速いため、所有者だけでは管理しきれない竹林が多く存在し、これにより倒竹や生態系の破壊などの「竹害」が発生します。このような問題を解決するために竹林整備活動を行っています。今後は伐採後の竹の活用方法についても目を向けて、実施していきたいと考えています。

新町防災教室

新町防災教室は新町の小学生たちに向けて防災教育を行う活動です。小学生に向けて防災の知識を教え、防災について一緒に考えるワークを行いました。知識を教える時には小学生に質問しながら行うことで一方的な学びにならないようにしています。さらに実際に災害時に役立つ新聞紙スリッパを作成し、安全性を確かめるために卵の殻の上を歩いてみるといった体験をすることで楽しみながら学べる内容にしています。最後には小学生に確認テストを出し、解いてもらうことで学んだことが振り返られるようにしました。

今後の展望

私たち群馬高崎クラブでは、清掃活動や竹林整備、地域イベントの支援を通じて地域貢献を行うほか、南牧村での子どもとの交流など多様な活動にも取り組んでおり、学生時代にさまざまな経験を積める場です。今後としては、これまでに実施してきた活動を継続的に行うだけでなく、新たな地域や団体の方との関係を創出し、さらなる活動規模の拡大を行っていきたくと考えています。



高崎清掃活動



高崎清掃活動



新町防災教室



竹林整備活動

ゴミ拾い×GPSランアート

私たちT-GRAP(高崎GPSランアートプロジェクト)は、「群馬県のゴミ問題に対する意識改革」と「ゴミよりも価値あるものとの出会い」を目的に、毎月2回ほど高崎駅や高崎経済大学周辺で活動を行っております。活動内容は、ただのゴミ拾いではなく、「GPSランアート」と組み合わせた特徴的な活動です。「GPSランアート」とは、GPS機能を使用し、歩いた経路を記録することで地図上に絵を描くことを指します。

2024年度は、高崎経済大学周辺を中心に活動を行いました。運営メンバーが少ない中でも継続的に活動することができました。参加者の皆さまをはじめ、学生ボランティア活動支援室のスタッフの方々など、多くの方々の支えに心より感謝しております。改めて、いつも活動を支えてくださりありがとうございます。また、通常活動に加えて外郭団体とのコラボ活動も行いました。学生だけではなく、社会人の方々とも交流することができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

参加者の皆さんからは、活動に関して「ゴミ拾いをすることで、ポジティブな気持ちになれた」、「ゴミを拾うこと自体にも達成感が生まれた」などの感想をいただき、T-GRAPならではの魅力を伝えることができたことに嬉しさを感じました。参加者の皆さんからの感想は、運営メンバーにとっても大きな達成感や新たな気づきにつながります。また、活動を通じて、今いる環境を綺麗にしていきたいという意識を養うことができました。

T-GRAP(高崎GPSランアートプロジェクト)

今後も、「ゴミ拾い×GPSランアート」というT-GRAPならではの活動を通じ、ゴミ問題解決への貢献に加え、より多くの方との出会いや素敵なお縁をつないでいけるよう、活動を広げていきたいです。そして、引き続き、感謝の気持ちを忘れず活動を継続していきたいと思っております。



高崎経済大学水泳部の活動報告

私たち水泳部は、「第77回高崎市民水泳大会」に選手として出場するだけでなく、大会運営にも役員として関わらせていただきました。この大会は高崎市で毎年開催される伝統ある地域大会で、小学生から高齢の方まで幅広い年代の方々が参加し、水泳を通して交流を深める大切な場となっています。

前日の会場設営や景品の準備から参加させていただき、大会当日は、それぞれ持ち場について、大会役員として進行のサポートにあたりました。競技の誘導や案内、記録の補助などを通じて、運営の大変さややりがいの両方を実感することができました。

指導していただいた高崎市水泳協会の皆様、参加された市民の皆様にも、この場を借りてお礼申し上げます。

もちろん、選手としても競技に臨み、日頃の練習の

成果を発揮しました。全力で泳ぎきることができ、チームとして一体感を持って大会に挑むことができました。

今後も水泳の技量だけでなく、地域社会の一員としての責任や協調性を学び、地域行事への積極的な参加していきたいと思っております。



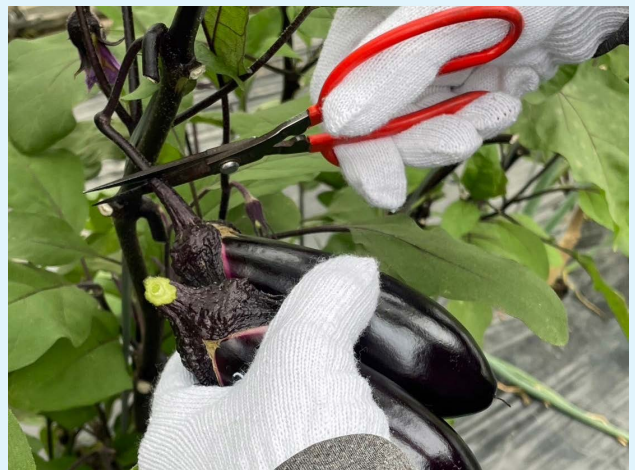
自営業に休みを！学生に経験を！

WIN-WINプロジェクト

私たちWIN-WINプロジェクトは「自営業に休みを！学生に経験を！」をスローガンに、農家の方の負担軽減と学生に農業体験の機会を提供することを目的に活動しています。具体的にメンバーは学生とともにボランティア活動をするだけでなく、JA高崎の方と連携しながらボランティアを募集している農家の方にあたり、アポ取りや当日の注意事項や活動内容などの情報交換を行います。また、SNSを通してボランティアの学生募集を行ったり、オンラインで当日に向けての研修会を実施したりして、ボランティア参加者(本学学生)の活動を支援しています。

2024年度の主な活動は、6月に高崎市菅谷町でナスの収穫や袋詰めを行いました。ビニールハウスでの収穫で山村さんという農家の方に収穫、袋詰めのやり方を学びつつ、農業をやったの経験などを話してくださり楽しくボランティアができました。また、学生も二人参加して、コミュニケーションをとりながら協力して農作業を行えました。そして、8月にJAたかさき東部カントリーエレベーターでブロッコリーの種まきを行いました。プランターに土を入れてなしたり、土に水をあげたりと言葉にすれば簡単なことも実際にやってみると、コツが必要だったり効率的にできなかったりと難しいこともあり、とても興味深かったです。一方で、真夏の活動であったため、暑さへの対策が難しく感じました。夏休みにボランティアをしたいニーズを猛暑が阻むということが今後も発生しうるので、ルール、管理の見直しの必要性を検討していきたいと考えています。さらに、11月にJA前橋のゆうあい館で農業まつりに参加しボランティアをしました。農家の方へのメッセージブースのお手伝いや乳搾りの疑似体験のお手伝い、バター作り体験のお手伝いを行いました。このまつりは老若男女の方が参加するまつりで、農作業のボランティアではなく、道案内をしたり、子供たちと接したりなど普段の活動とは違うことを行ったので新鮮でやりがいを感じられました。

先輩方が本企画を立ち上げてから今年で5年目を迎えます。最近、運営役員間の日程調整やJA高崎の方との連絡があまりうまくいっていないのが現状としてあります。7月の運営役員の交代を機に、新たなスタートを切ります。そのためにも、運営役員間の会話を大切に、ボランティア活動への事前準備を欠かさず行っていく、また、本学学生にも広く農業体験の機会を提供するため、SNSでの宣伝を有効に活用していきたいです。先輩方から引き継いだ本企画を、JAさんや農家さんへの感謝の気持ちを持って活動を行い、次の世代へと恩返しをつないでいきたいと考えています。今後とも、ご支援のほどよろしく申し上げます。



就職活動支援における地域連携

● インターンシップ送り出し

大学が窓口となり、官公庁のインターンシップへの送り出しを行っています。本学は公務員を志望する学生が多く、毎年多くの学生が自治体の実施するインターンシップに参加しています。

—— 2024年度 官公庁等へのインターンシップ実績 ——

伊勢崎市	2名	高崎市	2名	墨田区	1名
静岡県庁	3名	前橋財務事務所	7名	新潟県庁	3名
栃木県庁	2名	大阪府	1名	函館市	1名
群馬銀行	16名	長岡市	1名	東松山市	1名
みどり市	1名	宇都宮大学	1名	豊橋市	1名
甲府市	2名	北海道庁	1名	福島県庁	5名
青森県庁	2名	山形県庁	1名	ひたちなか市	1名
那須塩原市	1名	足利市	2名	群馬県庁	40名
富山県庁	1名	川越市	1名	石川県庁	1名
燕市	1名	大泉町	2名	宮城県庁	3名
岩手県庁	4名	関東森林管理局	1名	境町	1名
茨木県庁	1名	太田市	11名	金沢市	1名
八戸市	1名	札幌市	2名	石岡市	1名
会津若松市	1名				

● 地方就職希望者への支援

U・Iターン就職や地方への就職を希望する学生に対して、「Uターン志望者向け就職セミナー」を実施しています。

また右記の自治体と就職支援に関する協定を結んでいます。※()内は締結年月

- ・長野県(2015年2月)
- ・茨城県(2017年7月)
- ・栃木県(2015年12月)
- ・岩手県(2018年2月)
- ・札幌市(2016年10月)
- ・福井県(2022年10月)

【就職支援協定締結自治体との主な連携】

(2024年度)

- ・栃木県庁業務説明会(2025年2月)
- ・福井県 UI ターンセミナー(2025年2月)

さらに、全国に31ある同窓会の各支部と連携し、それぞれの地区で同窓生による就職相談会を開催しています。

【同窓会支部における就職相談会開催実績】

(2024年度)

- ・静岡支部(2024年8月)
- ・札幌支部(2024年8月)
- ・長野飯田支部(2024年8月)
- ・長野支部(2024年10月)

高崎経済大学では、これまで、約42,800人の卒業生を送り出しています。全国から高崎に学生が集まり、各地域の企業、自治体で活躍しています。

2024年度卒業生 出身地域別学生割合

地域	人数	割合
北海道	48	5.3
東北	133	14.7
群馬(高崎以外)	177	19.6
高崎	69	7.6
関東(東京・群馬・高崎以外)	181	20.0
東京	15	1.7
甲信越	119	13.1
北陸	38	4.2
東海	78	8.6
近畿	18	2.0
中国	2	0.2
四国	7	0.8
九州	12	1.3
国外	8	0.9
不明	0	0.0
計	905	100.0

(人) (%)

2024年度卒業生 地域別就職割合

地域	人数	割合
北海道	17	2.1
東北	33	4.1
群馬(高崎以外)	108	13.3
高崎	37	4.6
関東(東京・群馬・高崎以外)	109	13.4
東京	357	44.0
甲信越	39	4.8
北陸	18	2.2
東海	40	4.9
近畿	40	4.9
中国	2	0.2
四国	2	0.2
九州	7	0.9
国外	2	0.2
不明	0	0.0
計	811	100.0

(人) (%)

ラジオゼミナール

高崎のコミュニティ放送局であるラジオ高崎と連携し、大学の地域貢献の一環として「ラジオゼミナール」を放送しています。

これは、本学の教員が、専門分野から地域社会の課題について紹介し、研究成果やゼミナール活動報告を交えた情報発信を行っています。

QRコードを読み込みいただくと、過去に放送された音源を試聴することができます。



ラジオ高崎 FM76.2MHz z
 毎週金曜日 9:30～9:44
 再放送：①土曜日 11:15～11:29
 ②翌週月曜日 19:15～19:29
 ③翌週水曜日 10:30～10:44



2024年度ラジオゼミナール

※職名は放送当時

回	放送日(金曜)	タイトル(ラジオ高崎作成)	担当教員	学部	職名
1	4月26日	高崎経済大学の地域社会貢献活動について	唐澤 達之	経済	副学長
2	5月3日	①先生の自己紹介・専門分野について	中村 匡克	地域政策	教授
3	5月10日	②公共選択について			
4	5月17日	①都市地理学とはどのような学問なのか？	佐藤 英人	地域政策	教授
5	5月24日	②都市地理学からみた快適で安心な住まいとは？			
6	5月31日	①先生の自己紹介・専門分野について	服部 昌彦	経済	准教授
7	6月7日	②googleと独占禁止法			
8	6月14日	①先生の自己紹介・専門分野について	外山 昌樹	地域政策	准教授
9	6月21日	②観光の魅力について			
10	6月28日	①先生の自己紹介	岡田 知之	経済	准教授
11	7月5日	②専門分野「経済成長論」について			
12	7月12日	①先生の自己紹介と専門分野について	津曲 達也	地域政策学	准教授
13	7月19日	②専門分野「高等教育」「データサイエンス」について			
14	7月26日	①先生の自己紹介について	板垣 智洋	経済	准教授
15	8月2日	②専門分野「数学」「多元環の表現論」について			
16	8月9日	①先生の自己紹介と専門分野について	鈴木 洋昌	地域政策学	准教授
17	8月16日	②専門分野「地方分権」「大都市制度」について			
18	8月23日	①先生の自己紹介と専門分野について	藤岡 慧	地域政策	特命助教
19	8月30日	②専門分野「心理計量学」について			
20	9月6日	①先生の自己紹介と専門分野について	矢野 修一	経済	教授
21	9月13日	②専門分野「世界経済論」「開発経済論」、グローバルサウスの研究について			
22	9月20日	①先生の自己紹介と専門分野について	八木橋 慶一	地域政策	教授
23	9月27日	②自治体・NPOによる終活支援 —おひとりさま時代の地域コミュニティのあり方			
24	10月4日	①先生の自己紹介と専門分野について	藤井 孝宗	経済	教授
25	10月11日	②魚の資源を守るために			
26	10月18日	①先生の自己紹介と専門分野について	若林 隆久	地域政策	准教授
27	10月25日	②AIを活用したリーダーシップ開発			
28	11月1日	①先生の自己紹介と専門分野について	谷川 卓	経済	准教授
29	11月8日	②哲学とはいったい何をする学問なのか;最近の研究の紹介を通じて			
30	11月15日	①先生の自己紹介と専門分野について	丸山 奈穂	地域政策	教授
31	11月22日	②観光学とは何か;特にコロナ禍後の観光について			
32	11月29日	①先生の自己紹介と専門分野について	梅島 修	経済	教授・学部長
33	12月6日	②外国産の安売りから、あなたの企業を救うアンチダンピング関税制度			
34	12月13日	①先生の自己紹介と専門分野について	吉原 美那子	地域政策	准教授
35	12月20日	②給食の無償化～教育政策論的視点から			
36	12月27日	①先生の自己紹介と専門分野について	野崎 謙二	経済	教授
37	1月3日	②海外フィールドワークの魅力			
38	1月10日	①先生の自己紹介と専門分野について	高橋 美佐	地域政策	准教授
39	1月17日	②ランダムネス(偶然)と待ち行列			
40	1月24日	①先生の自己紹介と専門分野について	阿部 圭司	経済	教授
41	1月31日	②金融リテラシー			
42	2月7日	①先生の自己紹介と専門分野について	佐藤 徹	地域政策	教授
43	2月14日	②EBPM(Evidence-Based Policy Making)、 エビデンスに基づく政策立案について			
44	2月21日	①先生の自己紹介と専門分野について	櫻井 常矢	地域政策	教授
45	2月28日	②高齢化・人口減少下の地域づくりと支援システム			
46	3月7日	①先生の自己紹介と専門分野について	新井 庭子	地域政策	特命助教
47	3月14日	②知識を記述する言語表現～理科教科書を例に、計量言語学の分析方法で			
48	3月21日	家族の歴史	唐澤 達之	経済	副学長

教員情報

専任教員一覧

本学には、幅広い分野・フィールドで研究を行う教員が在籍しています。
QRコードを読み取りいただくと、「現在の研究課題」や「社会における活動・受賞歴等」など、さらに詳しい情報を閲覧することができます。



経済学部専任教員



地域政策学部専任教員



地域政策学部特命助教

公立大学法人 高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

地域・社会貢献白書 2025

2025年 10月発行

公立大学法人 高崎経済大学
〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町 1300番地
Tel 027-343-5417(代)



高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

